

アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究

吉田右子・川崎良孝

Abigail Van Slyck and the study of library history, by YOSHIDA Yuuko and KAWASAKI Yoshitaka.

本稿は建築史研究者で文化景観学、子どもの空間、図書館建築などに関心を持つアビゲイル・ヴァンスリックの図書館史研究を研究史的に取り上げたものである。本稿では代表作『すべての人に無料の図書館』を含めて、ヴァンスリックの研究の特徴を2つの側面から明らかにした。従来の図書館建築史研究やカーネギー図書館の研究史の中での斬新さと特徴、および図書館というスペースに注目しての女性や利用者からの視点による図書館の捉え返し。そうした特徴を指摘しつつ、いっそう盛んになってきている「場としての図書館」への歴史的研究の貢献の可能性と、この視点の重要性を指摘した。

1 はじめに

1980年代以降の図書館史研究の特徴は図書館にたいする批判的視座にある。さらに1990年代以降の研究は、文化政治学的アプローチに影響を受けており、批判的視座に加え図書館をめぐる文化現象に内在する権力構造の検証が分析に取り入れられるようになった。批判的分析において分析対象となるのは特に階級、ジェンダー、人種などの概念であり、図書館をこれらの概念から再解釈する研究への取組みが積極的に進展している。とりわけウェイン・A. ウィーガンズが1990年代半ばから展開しているプリント・カルチャー研究やリーディング・スタディーズは、歴史、文学、社会学などの周辺領域にわたる広い視野から、例えばエスノグラフィックな手法を用いて図書館や読者の新たな像を描き出そうとする試みである。読みの実践の場として、公共図書館はコミュニティで重要な位置づけにある。プリント・カルチャー研究やリーディング・スタディーズでは図書館を含め読書行為を支える社会的機関の構図を含めて図書館を議論している。¹⁾

一方、ジェンダーという分析概念を、図書館建築

という物理的枠組みから分析してきたのがアビゲイル・ヴァンスリックである。批判的図書館研究の目的は図書館を存立させている諸力の文化政治的構図を明らかにすることにあり、ヴァンスリックの研究は、図書館建築という領域から、ジェンダー、階級などの視点で図書館専門職の本質を浮かび上げさせようとした点において、批判的図書館研究の系列に位置づけることができる。代表作には20世紀初頭のカーネギー図書館と女性図書館員を主題とする『すべての人に無料の図書館』²⁾がある。

2 ヴァンスリックと研究業績

アビゲイル・ヴァンスリックは、現在コネティカット大学の美術史デイトン教授職(Dayton Professor of Art History)の職にある。美術史学部の学部長を担っており、建築史や建築デザインなどの教育や研究に関わる建築学コース(Architectural Studies Program)の責任者である。また地方建築フォーラム(Vernacular Architecture Forum)では会長を務めるとともに、建築史学会(Society of Architectural Historians(SAH))では委員になっている。さらに2006年にはコネティカット州ニューロンドンのライマン・アレン美術館(Lyman Allyn Art Museum)で行われた展覧会「商業と文化：ニューロンドンのステイト街における建築と社会」

よしだ ゆうこ 筑波大学図書館情報メディア研究科
かわさき よしたか 京都大学大学院教育学研究科

May 2009

では、コネティカット歴史団体賞(Award of Merit from the Connecticut League of History Organizations)を受賞している。この展示はニューロンドンの主要な商業地区の街路の建築と社会的発展を扱ったものである。

ヴァンスリックの研究領域はアメリカ建築と建築におけるジェンダー問題、特定の土地における固有の建築と文化景観学、子どもの空間、図書館建築などであり、19世紀と20世紀のアメリカの公共建築を主たる分析の対象とする。方法論としては建築物への文化社会学アプローチを取っている。図書館関係の文献を中心に主要な業績を一覧にすると次のとおりである(*印は日本語訳がある文献)³⁾。

1991 「カーネギーとアメリカ図書館の改革」

“‘The Utmost Amount of Effectiv [sic] Accommodation’: Andrew Carnegie and the Reform of the American Library,” *Journal of the Society of Architectural Historians*. ※博士論文のダイジェスト

1995* 『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』 *Free to All: Carnegie Libraries and American Culture, 1890-1920*. ※カーネギー図書館の建築の包括的研究

1996 「女性と図書館浮浪人：ヴィクトリア朝時代のアメリカのジェンダーと公共スペース」

“The Lady and the Library Loafer: Gender and Public Space in Victorian America,” *Winterthur Portfolio* ※女性用閲覧室

2001 「図書館員と図書館」 “The Librarian and the Library: Why Place Matters,” *Libraries & Culture*. ※講演会記録

2003 「図書館の内側：アメリカ図書館史に女性を残す」 “On the Inside: Preserving Women’s History in American Libraries,” *Restoring Women’s History Through Historic Preservation*. ※歴史的建造物の保存の意義

2006* 「楽しみの管理：図書館建築と読書のエロティクス」 “Managing Pleasure: Library Architecture and the Erotics of Reading,” in *The Library as Place: History, Community, and Culture*. ※ソーシャル・ライブラリーから戦後の図書館までを扱う

2006a 『造られた荒野：サマーキャンプとアメリカ

吉田・川崎：アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究

青年の形成, 1890-1960年』 *A Manufactured Wilderness: Summer Camps and the Shaping of American Youth, 1890-1960*.

2006年に発表された『造られた荒野：サマーキャンプとアメリカ青年の形成, 1890-1960年』が最新の単行書である。同書は、子どものサマーキャンプの歴史的検討を通じて、ジェンダーや健康概念、自然に関わる考え方などを手がかりに、19世紀後半以降のアメリカの景観と子どもの社会化を分析している。同じテーマの研究に「ミネソタのサマーキャンプのテントと小屋⁴⁾」や「アメリカのサマーキャンプでの台所と食事礼儀⁵⁾」がある。

まず本稿ではサマーキャンプを扱った近年の著作『造られた荒野』を通じて、ヴァンスリックの研究手法の特徴を示し、図書館研究について考えていくための手がかりとする。『造られた荒野』は20世紀前半期のサマーキャンプを後述するような広い意味での建築学的な見地から解明した業績で、ヴァンスリックの研究の手法や分析視角の特徴が十分に表れている。

ヴァンスリックにとっては、20世紀のアメリカ社会の青少年生活に設定されたサマーキャンプを通して、近代の青少年期が社会的にどのように構成されていったのかを解明することが研究課題である。研究の狙いは、アメリカ社会における広範な現象であるサマーキャンプを取り上げて、アメリカ社会を成立させている社会装置の1つとしてサマーキャンプを認識し、そこに埋め込まれたシンボリックな現象や言説を通じてアメリカ社会を読み解くことにある。アメリカ社会に広く受容されている文化的事象を分析の対象として取り上げる手法は、ヴァンスリックの研究の特徴であるといえる。図書館研究も同じような認識を出発点としている⁶⁾。

分析対象であるサマーキャンプはまず「文化景観」(cultural landscape) としてとらえられる。サマーキャンプをめぐる景観とサマーキャンプでの社会生活の交差部分をみていくことで、キャンプの全体像が検討される。これはサマーキャンプを構成する建物とそれを使って活動する人間の関係性を明らかにしようとする試みである⁷⁾。さらにサマーキャンプをめぐる制度が、建築様式という物理的な形へと変換されるプロセスが解明される⁸⁾。

サマーキャンプはアメリカ社会と同じように、ジェンダー、階級、人種概念が交差する場でもあ

る。ヴァンスリックはそれぞれの概念をサマーキャンプという枠組みを通して観察することで、こうした概念をサマーキャンプが補強し、再生産していることを指摘している⁹⁾。

同書では文化景観として研究対象を把握することによって、建築史研究が文化研究へと接合され、アメリカ研究のための新しい領域が示されている。そこには図書館研究との共通点がはっきりと表れている。すなわちジェンダー、階級、人種といった分析枠組みが用いられていること、建築あるいは物理的様式を媒介にして、その使われ方から特定の文化的営為の置かれた状況や関連する人間行動を浮かび上がらせていること、特定の文化活動が物理的様式を規定していくプロセスを明らかにしている点などである。ヴァンスリックの研究は、すでにいわば普遍的な存在として認識されている文化的風景が、いかにしてその自明性を獲得していったかを明らかにすることを目的としている。研究対象は異なるものの、本研究で示された研究目的、研究手法、分析視角は図書館研究の場合とほぼ重なっている。

3 従来の図書館建築史研究

建築学の研究者としてのヴァンスリックの図書館へのアプローチは、従来の図書館研究の方法論とは異なり、図書館という場所そのものに焦点を当てるものである。ヴァンスリックの研究の特徴を把握するために、まず従来の図書館建築を簡略に取り上げ、次章ではカーネギー図書館の歴史研究をまとめておく。

図書館建築史を扱った文献の数は少ないものの、ヴァンスリック以前にもいくつか単行書が発表されている。例えばドナルド・オラーツは1991年に刊行した『図書と青写真：アメリカ公立図書館の建物』¹⁰⁾で、公立図書館の建築を1850年から1893年、1894年から1918年、1919年から1945年、1946年から1989年の4期に分け、各時期の建築の特徴を設計プラン、建築家、予算などから明らかにしている。しかしながら図書館員によって執筆された同書は、アメリカ建築史全体のなかに個々の図書館の建物を位置づけるという観点からすれば、弱点があると言わざるをえない。

この観点からすると1982年にミシガン大学から博士号を獲得したケネス・プライシュの「アメリカ小規模公立図書館：建築類型の発生と進展」¹¹⁾は、建築

史の研究者による図書館建築についての史的研究である。プライシュによると、これまで図書館建築の研究が少ないとともに、大規模図書館を対象に図書館関係者によって記されてきたのである。そしてプライシュは建築学の観点から19世紀後半の小規模公立図書館について総合的な分析に向かうことになる。同論文は本文392頁、写真や図など256頁、計648頁という大部の力作である。20世紀に入る以前に建てられた公立図書館400館以上を分析し、建物だけでなく、館内平面図や館内配置なども扱っているが、そうした場がどのような意味を持つのかという点までは考察していない。博士論文では「1850-1890」年となっているが、同論文は1850年以前の図書館史、図書館建築に本文の3分の1弱をあてている。プライシュはこの博士論文をもとにテーマをいっそう絞り込んで、1997年に『ヘンリー・ホブソン・リチャードソンとアメリカ小規模公立図書館：類型研究』¹²⁾を刊行した。同書は当時あって最も重要で影響力のあった図書館建築家としてのリチャードソンと小規模公立図書館の関係を扱っている。第1章「高貴で政治的な生活の拠点」では、移民の増大や急速に発展する産業経済に対抗するために、ニューイングランドの伝統的な家父長制度やビジネスの擁護者は、文化を秩序の維持に活用しようとしたとする。これが同書の基調を設定する。第2章では1875年までのアメリカの代表的な図書館、すなわちハーヴァード・カレッジ、ボストン・アセニウム、ボストン公立図書館などを含めて、図書館建築史を概略している。続く各章はリチャードソンが設計したマサチューセッツ州のウォバーン(Woburn)、ノース・イーストン(North Easton)、それにミシガン州のイースト・セギノー(East Saginaw)などの図書館建築を詳細に検討している。リチャードソンの図書館の外観は中世の教会のようで、内部は薄暗く、聖なる場所のように見えるのだが、それはリチャードソンがまさに意図したことであつたという。その意図とは一言でいうと、伝統の擁護であり、秩序の維持である。プライシュはこうした図書館が、機能的な建物を求めるウィリアム・プール(William Frederick Poole)を中心とする図書館指導者から反論を受け、建築家と図書館員に敵対関係があつたことも見逃してはいない。本書はリチャードソン個人の手書き資料やリチャードソンの建築事務所の資料、さまざまな図書館の原資料を駆使し、一級の研究書

May 2009

である。またほとんど各ページに図書館の外観や内部、それに平面図などがでており、読み物としても楽しめる。しかし、博士論文と同じように、そうした図書館内部の空間がどのように使われ、どのように変容していくかといったこと、すなわち図書館員と図書館員のかかわり、図書館員と利用者の関わり、およびそれらと空間との関係についての分析はなされていない。

なおリチャードソンについては1987年に建築史の研究者ジェイムズ・オゴーマンが『H.H.リチャードソンとアメリカ社会の建築様式¹³⁾』を刊行している。ブライシュが図書館に絞ったのにたいして、教会、学校、役所、議事堂、私邸、刑務所、学術団体の建物、大規模な卸売り店、駅舎など、リチャードソンの建築全体を紹介し検討している。オゴーマンの特徴は、おのおのの建物の詳細な建築学的な考察ではなく、イメージとしての建築、社会的プログラムの内実を具体的に表明するものとしての建築様式に焦点をあてている点にある。この視点は、リチャードソンが意識的あるいは無意識的に最も心に抱いていたのがイメージであるとのオゴーマンの認識による。と同時に、これまでの建築史の研究が、建築学上の個別な詳細を扱っていたことへの批判でもある。

なお2001年にはヴァージニア・マコーミックが『オハイオ州の教育関係の建築¹⁴⁾』を刊行した。同書はオハイオ州での小中高等学校、大学、博物館、音楽堂、オペラハウスなどで歴史的な建造物から現在に至る代表的な建物を取り上げ、写真や平面図を多用して説明している。そこでは第7章を図書館にあて、リチャードソンの図書館建築、カーネギー図書館、それにクリーヴランドやシンシナティの公立図書館などを取り上げている¹⁵⁾。基本的には、教育関係の建築を歴史的に通覧したもので、そうした建造物を特定の視点や方法で探求してはいない。

このように図書館史研究および建築史研究からの業績をかいま見たのだが、本節で取り上げるヴァンスリックの場合、同じように建築をテーマにしているものの、アメリカ建築史の全体的な理解にもとづく各個体の物理的特徴の記述にとどまらず、物理的観点を図書館の思想や理念に結びつけていく手法に特徴がある。それも抽象的な思想や理念に結びつけるというより、そうしたスペースとスペースを活用する人との関係性、さらにスペースを活用する人と人との関係性を探っていく手法に特徴がある。そし

吉田・川崎：アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究
て分析は図書館の外観だけでなく、図書館の内装、備品などに及んでいる。

4 従来のカーネギー図書館の研究史

カーネギー図書館にかかわる業績は図書館関係文献ではかなりな数になる。本節ではカーネギー図書館に的を絞った単行書をいくつか取り上げることで、研究の発展と現状を示しておく。単行本として最も早いのは、1968年刊行のデイヴィッド・マクレオドの『ウイスコンシン州におけるカーネギー図書館¹⁶⁾』である。本書は題名が示すようにウイスコンシン州に限定して、カーネギー図書館の実態を詳細に探った業績であり、後述するジョージ・ボビンスキーの業績が総論とすれば、マクレオドの本書は各論といえよう。第1章の章題「アンダーソン大佐の図書館」という標題が示すように、カーネギーの少年時代の図書館利用経験から説き起こし、自助努力と教育機会の提供という観点から、住民の近いところに小さな図書館を数多く寄付したとまとめている。第2章ではウイスコンシン州には1901年から1915年にかけて60の自治体に63の図書館建物を寄付したこと、この60の自治体の内56はすでに公立図書館を有していたことを明らかにしている。このことからウイスコンシン州の場合、公立図書館設置よりも図書館への関心の高揚、図書館サービスの向上が重要になると指摘している。さらにカーネギーの寄付を当初に拒否した自治体は11で、そのうち6つの自治体は後に寄付を受領している。続く第3章ではカーネギー図書館の建物を扱っている。この最初の3つの章は確かに「カーネギー図書館」を扱っているのだが、後半の3つの章はむしろそののち(第2次世界大戦後を含む)の図書館史、すなわちウイスコンシン州の小さな公立図書館に関する要領を得た歴史になっている。そうした意味で、本書は内容と書名が一致していない。本書の欠点は2つある。まずボビンスキーのミシガン大学への博士号請求論文「アメリカ公立図書館発展におけるアンドリュー・カーネギーの役割¹⁷⁾」に目を通していないことである。それにカーネギー・コーポレーションが整理して保管しているカーネギーと各自治体とが取り交わした文書(マイクロフィルム)にあたっていないことである。この2つを活用していれば、いっそう充実した図書になったであろう。

ところでジョージ・ボビンスキーの1966年博士論

文は1969年になって『カーネギー図書館：その歴史とアメリカ公立図書館の発展にたいする影響¹⁸⁾』との書名でアメリカ図書館協会から刊行された。おそらく『カーネギー図書館』ほどアメリカ図書館史で待望されていた図書はないであろう。そしてポビンスキーは本書の刊行によって確固たる名声を獲得した。本書はカーネギー図書館の特定の側面に課題を限定したのではなく、カーネギー図書館の全体像を、カーネギー・コーポレーションが所蔵する第1次資料を中心に幅広く渉猟して描き上げたものである。すなわち確固たるデータを元にカーネギー図書館の全体像を描くことで、その後のカーネギー図書館の研究を刺激し、常に引用され、参照される業績になった。カーネギー図書館について常識とされる事柄の多くが、このポビンスキーの業績に依拠している。

本文では、カーネギーの公立図書館に関する慈善思想、図書館への寄付を取り仕切ったカーネギーの私設秘書ジェイムズ・バートラム (James Bertram)、図書館の寄付の条件、カーネギー図書館の建築、特別な寄付(黒人図書館を含む)、図書館の寄付への反対運動(貧しい財政や労働団体による反対など)、寄付が実質化せず図書館ができなかった場合など、重要とされることは余すことなく豊富な基礎的データによって解明されている。カーネギーは1886年から1919年にかけて、1,412のアメリカの自治体に1,679の図書館を寄付し、その総額は4,100万ドルに達する。ポビンスキーは付録で寄付を受け取った自治体の一覧を作成し、そこには自治体名、寄付の以前に公立図書館が存在したか否か、寄付の額、それに受領年月日を一覧にしており、この表だけでも圧巻である。そればかりではなく、カーネギー・コーポレーションが経済学者アルヴィン・ジョンソンに依頼し、カーネギーが図書館建設から図書館員養成およびアメリカ図書館協会への援助に方向転換することになったいわゆる1915年のジョンソン報告¹⁹⁾も扱い、その後の図書館状況もまじえて、最終章ではカーネギー図書館の影響、評価をまとめている。このポビンスキーの研究は、そののちの研究の原点となった。すなわち、後続する研究はポビンスキーが示した内容を各論的に深めるという方向をとった。その場合、例えば州レベルに限定して考察したのが既述のマクレオドの業績といえる。

ポビンスキーはカーネギーの寄付が拒否にあった自治体も扱っていた。これに的を絞ったのが、1993

年に刊行された『拒否されたカーネギー：図書館建設の寄付金を拒絶したコミュニティ、1898-1925年²⁰⁾』である。これはロバート・マーティンを編者とする論集であるが、論集刊行の経緯は次のとおりである。1983年のことだが、W. ウィーガンは『ジャーナル・オブ・ライブラリー・ヒストリー』に2年間の図書館史文献の展望を執筆中、地方史の雑誌(*West Virginia History*)にウェスト・ヴァージニア州ホウィーリング(Wheeling)でのカーネギーの寄付が、住民投票によって拒否されたという論考に目がとまった。そこでは石炭や鉄鋼の労働指導者が反対運動を指導したのである。グリーンウッド出版社のBeta Phi Mu 研究書シリーズの編者でもあったウィーガンは、ポビンスキーの『カーネギー図書館』を参照した。同書の基礎データを活用してカーネギーの寄付を明確に拒否した自治体を47とし、そのうち26は市議会の決定、21は住民投票で否決されたと整理した。市議会や住民投票での否決の主たる理由は、増税への反対やカーネギーの「汚れた金」の受領への拒否であった。ウィーガンはこの点をさらに追求する価値があると考え、R. マーティンを編者に研究計画を立てた。そして、ペンシルヴァニア、ニューヨーク、イリノイ・ミシガン・オハイオ、インディアナ、ミズーリ・アイオワ・ネブラスカ、7つの南部のコミュニティ、それにピッツバーグと7つの章を設けて、おのおのに熟達した図書館史研究者をあてたのである。各章の執筆者は、R. ドゥモント (Rosemary R. DuMont), P. リチャーズ (Pamela S. Richards), F. スティーロウ (Frederick J. Stilow), D. リング (Daniel F. Ring), J. タッカー (John M. Tucker), D. デイヴィス・ジュニア (Donald G. Davis, Jr.) など、すでに定評ある図書館史研究者であった。そして可能な限り広範に第1次資料を使用すること、それに先入観なしにそうした資料を読み解くことを執筆者に求めたのである。

ポビンスキーが示した47の自治体のうち、同書では40の自治体を取り上げており、網羅性は高いといえる。各執筆者の記述から導き出された結論には例えば以下がある。組織的な労働組合からの反対は予想に反して非常に少なく、寄付が認められなかった理由は労働界の反対ではなく、純然たる各自治体固有の理由による。そうした理由に関連する要因として、階級、女性、および経済を指摘し、それらが組み合わさっているとした。同書によれば、カーネギー

May 2009

への寄付を申し込むという最初の段階で、女性や女性クラブが果たした役割は大きかったという。しかし寄付を得るには毎年の図書館運営費の充当について男性支配の市議会での決定が必要であり、そうした過程で組織的な反対を受け、政治的に未熟な女性による運動が失敗に終わった場合がある。ここでの女性の強調は、1970年代中葉以降の全般的な図書館史研究での関心を意識しつつ、客観的に第1次資料を読み込んだところから浮上してきた歴史的事実といえよう。ポピンスキーは自治体が寄付を得なかった理由として、既述の理由を含めて10を超える理由(土地の問題、第1次世界大戦の影響、いっそう多額の寄付の期待、地元の慈善家による寄付の申し出など)を提供している。これらの理由について、『拒否されたカーネギー』はいっそう精緻な研究を求めている。それは単なる詳細を明らかにするだけでなく、当時の自治体の状況や住民の関心の把握と、それにもとづく図書館状況を理解するためであり、いわば全体像の構成のための各論の研究を求める結果になっている。

1992年にヴァージニア・コモンウェルス大学から博士号を獲得したキャロライン・レーザーマンの「リッチモンドは図書館を拒否：20世紀初頭におけるヴァージニア州リッチモンドにおけるカーネギー図書館運動²¹⁾」は、上に示した『拒否されたカーネギー』の提言を実行する結果となった。業績としては博士論文が1992年、『拒否されたカーネギー』は1993年であるが、レーザーマンは先行文献を扱った部分で『拒否されたカーネギー』が出版過程にあることを認識している²²⁾。ポピンスキーはリッチモンドにごく簡略に触れているにすぎず、また『拒否されたカーネギー』はリッチモンドに触れていない。というのは市議会や住民投票での拒否が生じたのではないからである。『拒否されたカーネギー』はカーネギーの寄付が拒否された理由として、純然たる各自治体固有の理由を重視していた。レーザーマンの研究はまさに固有の理由を探った研究といえる。そして大きくみると社会的要因(人種問題を含む)、財政的問題(社会サービスの優先順位を含む)、政治的問題などを、カーネギーの寄付が実現しなかった理由とした。この研究はポピンスキーおよび『拒否されたカーネギー』を受けた各論研究といえるだろう。

最後にセオドア・ジョーンズが1997年に発表した『アメリカ全国のカーネギー図書館：公共の遺産²³⁾』

吉田・川崎：アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究

に触れておきたい。この354頁からなる大部の図書は、例えば「アンドリュー・カーネギー」、「公立図書館の建物」、「図書館プログラム」、「カーネギーの寄付への反応」、「カーネギー図書館の建築」、「カーネギー図書館での活動」といった章からなる。しかし新しい知見を示すといった点ではみるべきところがない。同書は文献研究が徹底されておらず、上記の『拒否されたカーネギー』を文献にあげていないなど、研究面からみると不十分な著作である。しかし、多くの逸話は面白く、また写真などがふんだんに入り、さらに読みやすいという点で、研究書というよりも幅広い読者を対象とする図書として大きな意義がある。

学術雑誌での論文は指摘しないが、カーネギー図書館にまつわる多くの側面について、課題を絞った高質の研究論文が出てきていることだけを指摘しておきたい²⁴⁾。カーネギー図書館の図書館史研究での扱いをまとめると以下ようになる。包括性および基礎的データや1次資料の活用という点で、ポピンスキーの業績は、カーネギー図書館研究の基礎をすえる確固たる研究であった。そののち、ポピンスキーが示した多くの事柄を各論的に深く探究する業績が図書および雑誌論文というかたちで輩出されてきた。さらに一般向けの大部の啓蒙書も出版されたのである。こうしたカーネギー図書館の研究史をみると、以下に示すヴァンスリックのカーネギー図書館にたいするアプローチや問題意識は新鮮なものであり、従来の研究史の延長というよりも、まったく異なる視点と方法からの接近である。

5 ヴァンスリックの視点と分析の枠組み

建築学の研究者としてのヴァンスリックの図書館へのアプローチは、従来の図書館研究の方法論とは異なり、図書館という場そのものに焦点を当てるものである。19世紀末から20世紀初頭に建てられたカーネギー図書館がヴァンスリック自身の研究対象であるが、例えばカーネギー図書館の保存運動に関わる過程で、建物の外観だけでなく図書館内部を保存する必要性についても論じている²⁵⁾。ヴァンスリックはその理由について次のように説明している。図書館の外観は図書館での男性の活動に結びつくが、内装は女性の活動に関係している。そのため備品、家具などの内装が消失すれば、同時代の女性図書館員の活動も失われることになる。なおカーネギー図

書館が設立された20世紀の初頭は女性専門職が出現した時代であり、図書館は女性専門職の代表的な職場でもあった。²⁶⁾

ヴァンスリックの主要な関心は、物理的な場所とジェンダー・システムの関係の解明にある。女性の職場を男性によって規定された物理的な枠組みとみなし、図書館の内部空間をジェンダー抗争の場として把握している。そして実際に図書館で働く女性が、男性による業務の制御をどのようにとらえたのか、またそうした枠組みをいかにして打ち破っていったのかということ明らかにしようとする。²⁷⁾

図書館界において女性の地位は男性より明らかに低く、少数の男性幹部が女性の業務を制御していた。女性は男性に劣った専門職としてとらえられていたが、そうした見方は女性専門職の働く空間に映し出されていた。²⁸⁾ただし制御された空間で働く女性の職場は図書館だけに限らなかった。20世紀初頭の女性専門職の職場では物理的環境(部屋、備品、家具)が女性専門職を拘束していた。女性は専門的な家具やテクノロジーに囲まれ、余分な動きを許されなかったのである(専門職といえるか否かはともかく、ヴァンスリックが例示するのは広大なタイプ作業室や電話交換室である)²⁹⁾。

このような状況にあつて女性図書館員はさまざまな手段で、自らの身体的動きと考え方を拘束する職業空間との関係を断ち切ろうと試みている。ヴァンスリックはその例として、子どもへのサービスを指摘し、「児童図書館員は貸出机という保護された区画から踏み出した。……図書館における己の専門職としての貢献は、貸出机に依存するのでもなく、またライブラリー・ビューローが売り出す多くの労働節約型の用品に頼るものでもないことに気づいた。そうではなく、図書館員としての有効性は、想像力、表現力、声、ジェスチャーといった個人的な属性に左右されることを知ったのである」とその様子を描写した。³⁰⁾そして女性図書館員が新たなサービスを模索しながら、男性によって規定された職業空間を脱出していくプロセスを物理的空間に焦点をあてて明らかにしている。³¹⁾最終的には「要するに、図書館の建物は図書館業務の多くの側面を高めはしたが、もはや図書館活動の閉じられた宇宙として設定されてはいなかったのである」³²⁾と結論づけたのである。

6 ヴァンスリックと図書館史研究:個別研究の分析

6.1 公共図書館の女性利用者:女性用閲覧室の研究

すでに紹介したようにヴァンスリックの図書館に関わる代表的な研究はカーネギー図書館を扱った『すべての人に無料の図書館:カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』である。業績一覧(第2章参照)や注3で示したように、その他にもいくつか図書館に関連する論文があるが、ここでは同書より前の時代を研究対象とした1996年の論考「女性と図書館浮浪人(library loafer):ヴィクトリア朝時代のアメリカのジェンダーと公共スペース」³³⁾を取り上げる。『すべての人に無料の図書館』と「女性と図書館浮浪人」はいずれもジェンダーと図書館空間の関係性を扱っており、その意味では研究テーマとして共通点を有する。しかし前者が主として女性図書館員に分析の焦点が当てられているのに対し、後者は女性利用者が分析対象となっている。

本論文「女性と図書館浮浪人」はヴィクトリア時代のジェンダー・システムとその理念的基盤を女性用閲覧室という空間から分析したものである。女性用閲覧室は、男性利用者から女性を隔離するために18世紀中頃から19世紀末にかけて設置された図書館内のスペースである。全米各地にカーネギー図書館が設置された20世紀初頭には衰退している。

同論文の目的は、空間が特定の社会組織に及ぼす影響を明らかにすることにある。すなわちヴィクトリア時代のジェンダー・システムを、女性専門職を多く擁した図書館という物理的な環境との影響関係によって浮かび上がらせようと試みる。³⁴⁾ヴィクトリア朝時代は、図書館だけでなく百貨店をはじめとする店舗や公共輸送施設などの公的な空間で、性別分離(sex-segregation)が行われていた。ヴァンスリックは先行研究を手がかりに、そうした性別分離の背景にある同時代の女性の社会的位置づけについて論じている。³⁵⁾

ヴァンスリックによると、ヴィクトリア朝時代の性別分離は女性を家庭内の存在とみなし、男性社会から隔離するためだけの物理的な政策ではなかった。性別分離は図書館におけるジェンダーの位置づけを示す文化政治的な制度であった。また性別分離は同時代の女性の社会進出を背景にしたものでもあった。女性はヴィクトリア朝時代に家庭内の家事から公共の家政的業務(municipal housekeeping)へ進出し

May 2009

たのであり、同時代のジェンダー・システムは女性が公的空間に存在することを妨げるものではなかった。むしろ公共の場における男女の位置づけは明らかに異なるものであり、性別分離はその差異を表現する一端を担っていたのである³⁶⁾(なお性的分離が女性の公的空間への進出を促したという立場を取る研究者(例えば Lynne Walker)と、性的分離によって女性が社会的に差別され締め出されたという考え方を取る研究者(例えば Mary R. Ryan)がいる³⁷⁾。

一方、図書館の場合、1850年代までは女子禁制の空間とされており、男性のための公的施設としての位置づけであった³⁸⁾。1850年代以降に女性が図書館という空間に進出するにあたっては、複数の理由から特別な措置が必要と考えられた。まず女性利用者は一般の男性利用者とは異なり、従来の図書館の秩序、すなわち学究的な読書空間を乱す存在としてとらえられていた。女性はファッション雑誌や娯楽雑誌を求めて来館し、そうした目的は従来の図書館の目的とは相容れない³⁹⁾。さらに図書館は女性利用者を図書館浮浪人(library loafer)と呼ばれる労働者階級の利用者から守る必要があった⁴⁰⁾。

1880年代になると女性用閲覧室は一般的な設備となった。同時代の図書館は家父長制度の比喩的存在であり男性主体の機関として想起され⁴¹⁾、女性閲覧室はヴィクトリア朝時代の家族の結束力の象徴である居間を模していた。女性閲覧室は図書館の他の場所とは明らかに異なる雰囲気を持つ場所として設置された。詰め物をした長いす、丸テーブル、カーペット、ドレープなど、女性閲覧室に置かれた家具は家庭的な雰囲気を配慮したものであった⁴²⁾。

ヴァンスリックは女性閲覧室が設置されない図書館があったことに着目し、女性のための「特定の設備」が存在しない例から、女性分離施設の存在意義を浮かび上がらせている。例えばマサチューセッツ州のように女性閲覧室がほとんど設置されていない場所では、図書館利用者は性差ではなく、中産階級という特定の階級としてみなされていたという解釈を導き出している⁴³⁾。また西部地域には、女性クラブによって設立された公共図書館があった。そうした女性の手による図書館に、家庭を模した女性的内装が見られなかったことにもヴァンスリックは注目した。女性自身が考える図書館とは、家庭的な空間ではなく事務的な空間であった⁴⁴⁾。男性が考える図書館内の女性利用者のあり方と、女性自身がとらえる図

吉田・川崎：アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究

書館利用との間には明らかに隔たりがあったことが示されている。

女性閲覧室は家庭内の居間を模したものではあったものの、異なる面も存在した。例えば居間は家庭の中心に位置していたが、女性閲覧室は図書館の中心からは遠ざけられた。その結果、女性閲覧室は図書館浮浪人と距離をおいたのだが、レファレンス・ルームなどの図書館の知的活動が活発に行われる空間からも遠ざけられたのである⁴⁵⁾。

ヴァンスリックはこの論文で建築設計図に基づく女性用閲覧室の位置づけ、内装、備品などの精査により、実証的に女性用閲覧室を検証している。その結果、女性用閲覧室がジェンダー・システムを具現化したものであることを示し、それが同時代の図書館の社会的秩序の維持のための装置として機能していたことを指摘している。女性の保護は女性閲覧室の機能の一面にすぎず、女性分離は物理的分離のみならず、図書館という空間における社会的分離をも意味していた。すなわち女性閲覧室は女性性を強調し、女性利用者を男性利用者とは一段劣る存在として固定化する装置であった⁴⁶⁾。

ヴァンスリックはさらに20世紀初頭の女性用閲覧室の衰退についても言及している。衰退の主たる原因は、図書館専門職という新たな職業が台頭し、それにともない図書館サービスが新たな段階に入ったことにあった⁴⁷⁾。新しい図書館サービスは利用対象者を従来とは異なる存在として把握した。サービス対象者としてとりわけ着目されたのは子どもで、女性利用者は相対的に軽視された。また労働者階級の図書館浮浪人は図書館利用者ではなくアウトサイダーとしてとらえられ、図書館内で女性利用者を保護する必然性は認められなくなった⁴⁸⁾。つまりヴァンスリックは、20世紀初頭の図書館サービスの新たな展開が利用者のジェンダーや階級の差異を克服する方向に向かったと結論づけている⁴⁹⁾。

「女性と図書館浮浪人：ヴィクトリア朝時代のアメリカのジェンダーと公共スペース」は女性用閲覧室という物理的な枠組みから同時代のジェンダー・システムを分析していくというヴァンスリックの方法論的枠組みが明確に示されている。また本論文では中心的な分析対象となるいくつかの拮抗する概念、例えば男性対女性、中産階級対労働者階級が示されており、研究の特徴である対抗軸の設定とその関係性の分析という側面が明確に表明されている。

6.2 公共図書館の女性専門職：『すべての人に無料の図書館』

次にヴァンスリックの図書館研究の代表作である『すべての人に無料の図書館』についてみていきたい。アンドリュー・カーネギーが19世紀末から20世紀初頭にかけて行った図書館への慈善事業は、アメリカの図書館史において最も重要な出来事であり、アメリカの公共図書館数は飛躍的に増加し、その数は1917年までに約1,700館に達している。同書はこのカーネギー図書館を詳細に分析することによって、図書館の役割や利用者への影響力を探っている。

ヴァンスリックが建築様式との関わりで着目したのは、図書館専門職の多数を占めていた女性図書館員である。少数の男性図書館幹部が多数の女性図書館員を率いる当時の図書館界については、図書館史のジェンダー研究ですでに解明が進んでいる。そうした研究は女性図書館員の置かれた地位を、給与や昇進などのキャリア形成の面から明らかにしてきた。⁵⁰⁾一方、ヴァンスリックの研究はそうした研究とは一線を画する。すなわち専門職的技量を発揮する場所として設定されたカーネギー図書館という職場の物理的枠組みと、女性専門職の関係を研究することで、女性図書館員の存在意義を明らかにしようとしている。

当時の女性図書館員は専門教育を受けたプロフェッショナルであったにもかかわらず、男性図書館員の下で補佐的な仕事に従事していた。女性図書館員の業務内容、職場環境は男性図書館員によって与えられたものであり、カーネギー図書館は図書館専門職の構図を具現化したものであった。ヴァンスリックはこの基本的な構図を踏まえた上で、内側からの対抗勢力を実証している。すなわち女性図書館員が図書館設計者の意図と、設定された持ち場の外部に自らの図書館サービスの活路を見出していった経路を、同時代の建築や図書館の内装、備品などを手がかりに明らかにしたのである。女性図書館員はまず自らを拘束する場所であった貸出机から離れ、さらには図書館の建物の外部に自らの活動の新たな領野を切り開いた。⁵¹⁾こうした女性図書館員の反撃は意識的、無意識的に行われたのであり、図書館におけるジェンダーをめぐる抗争を物理的な職場の様態から明らかにするものである。

女性図書館員に焦点を当てることによって、同書では対置される概念である男性図書館員や図書館幹

部を同時に浮かび上がらせている。本文に仕掛けられた対立的な枠組みのうち中心となる対抗軸は、男性対女性の対概念である。男性図書館指導者対女性図書館員は、最も明白な対抗概念として提示されている。「男性は管理運営の地位を支配し、女性はたいていして権威のない薄給の地位を満たすように奨励され⁵²⁾」ていたことがまず明らかにされる。しかし本書が明らかにするのはジェンダーをめぐる抗争だけではない。「訳者あとがき」で川崎が指摘しているように、同書には多数の対抗軸が設定されている。⁵³⁾例えば図書館の建設に関わった男性グループが、アメリカ生まれのエリートとアメリカに出自を持たない移民から構成されていたため、コミュニティにおける図書館の役割に関して意見対立が生じていたといったことである。⁵⁴⁾

利用者もまた複数の対立するグループから構成されていた。すなわち中産階級の利用者と労働階級の利用者である。中産階級の利用者は図書館を学術目的のために訪れ、目的意識が明瞭なのをしたいし、労働者階級はこれといった目的がないまま図書館を訪れ、新聞など軽い読み物を利用する。⁵⁵⁾ヴァンスリックは、図書館幹部がこうした異なる層を分離する政策を取っていたことを次のように指摘している。「市美観(City Beautiful)地区にある大規模な中央館(カーネギーの寄贈の有無を問わない)と、労働者階級の近隣コミュニティにあるはるかにつましい分館である。事実、この2種の図書館にみられる形の上での顕著な相違は、特定的には図書館利用、広くは都市の文化施設に関する階級的思想の緊張が、持続していることを実証している⁵⁶⁾」と分析し、中央館と分館という物理的枠組みでの階級の分離を明らかにしている。

さらにヴァンスリックは女性対男性としてとらえられていた対抗軸を掘り下げ、図書館をめぐる専門職の台頭と、その台頭によって位置づけが明らかに低下した素人の図書館関係者(例えば図書館に積極的に関与していた女性クラブのメンバー、図書館学校をでていない地方の中産階級の女性図書館員など)の存在をも指摘している。⁵⁷⁾いずれもカーネギーの図書館プログラムという1つの物理的なプロジェクトによって、そこに関係した人びとの言説、思想、行動に関わる複数の対抗軸を重ねることで、図書館をめぐる複雑な文化政治的な要素を浮かび上がらせる手法が取られている。

May 2009

1990年代以降、図書館史研究において研究対象となる図書館に没入するだけでなく、図書館を存立させている諸力の文化政治的構図を明らかにすることが求められるようになった。本書は図書館建築という領域から、図書館および図書館専門職に作動する権力を浮かび上がらせることに成功している。

6.3 場としての公共図書館：「楽しみの管理」

ヴァンスリックの最近の図書館研究は、ジョン・ブッシュマンとグロリア・レッキーが編集した『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』に掲載された論文「楽しみの管理：図書館建築と読書のエロティクス⁵⁸⁾」である。この論文は『すべての人に無料の図書館』で示された図書館の建築学的な検討を、利用者の身体感覚という側面から探っている。時代的には「女性と図書館浮浪人：ヴィクトリア朝時代のアメリカのジェンダーと公共スペース」と『すべての人に無料の図書館』を通して扱い、さらに第2次世界大戦後に至っている。

特に19世紀末から20世紀初頭はアメリカの公共図書館が、専門職の台頭による新たな段階を迎えた時期である。ヴァンスリックはこの時代の利用者の読書行為に焦点を当てて、図書館の空間と利用者の身体感覚の関係性をみることで、図書館が潜在的に持つ空間としての影響力に切り込んでいる。

この時代の大きな変化は公共図書館が開架式図書出納システムを採用したことであり、ヴァンスリックは、開架システムを取る図書館が「建物が公立図書館利用者に蔵書への制限のない視覚的、触覚的なアクセスを与えたとしても、エロティックな経験を奪い去る傾向にあった」と指摘する⁵⁹⁾。開架方式は利用者の自由を最大限に確保するとみる一般図式を批判し、むしろ図書館内部の設計や備品により「かつてないほどの身体的抑制を読者に求めた」ことを、図書館建築計画の精査によって指摘している⁶⁰⁾。

利用者の身体的感覚に着目した分析手法によって、図書館の理念や実践を文献から解明していく従来の図書館史研究の方法論からは得ることのできない図書館の利用実態を明らかにすることができる。本論文は、図書館制度の存在を基盤として図書館の場が規定されるだけでなく、建築物とそれを使う利用者が、図書館のあり方を規定していることを実証的に解明したものである⁶¹⁾。

吉田・川崎：アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究

7 場としての図書館研究、図書館史研究

図書館建築をヴァンスリックのような観点から考察する研究としては、例えば論集『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』のなかに、アダム・アレンソンによる論考「公立図書館の時代に先立つ公共の図書館⁶²⁾」がある。同論文は副題「アセニウムをはじめとする『ソーシャル・ライブラリー』の備品とデザインの解釈：1800-1860年」が示すように、19世紀の初頭から中葉にいたるアセニウムやソーシャル・ライブラリーのデザイン、装飾、備品の検討によって、図書館を支援したエリート文化、図書館の内容を形成したエリート文化を解明している。これらの備品などはこの種の図書館が果たした社会的役割を示してくれる。アレンソンは社会学的、人類学的、美術史的、歴史的アプローチを採用して、こうした図書館の失われた詳細を浮き彫りにし、都市労働者の余暇活動も検討した。ソーシャル・ライブラリーの建築や備品を私邸や新しく創られた公共スペースの建築や備品と並置することで、ソーシャル・ライブラリーの建築や備品の理解を提供した。そうした理解を通して、19世紀前半の公共の図書館の意味を豊かに描いたのである。

また同じ論集『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』に、ボニー・マックの「図書館の神話」が掲載されている⁶³⁾。この論文は図書館スペースの文化的状況を1428年の文献『高貴さの起源に関する論争』(Buonaccorso da Montemagno, *Controversia de nobilitate*)を取り上げて検討している。『論争』は高貴さを何で測るのかということをめぐる論争である。1人の女性をめぐる2人の求婚者があらわれ、1人は出自の高貴さを主張し、いま1人は出自は貧しいものの性格の高貴さを主張する。前者は家系のよさを示す石碑などが高貴さを証明すると主張し、後者は家に書齋を持つことが高貴さの証明になると主張した。この物語を手がかりに、マックは書齋というスペースの持つ意味、図書館のデザインの変遷を論じ(すなわち展示や見せ物としてのスペースへの転換。石碑に相当する)、『論争』という図書の扱われ方、分類のされ方の変遷(修辞学、騎士道文学、市民的ヒューマンイズムを扱う作品)をたどる。そして現代の物理的なフランス国立図書館と同書のさまざまな収納場所を示して、国立図書館が概念的に破綻していると論じる。マックは書齋や図書館と

いうスペースの社会文化的状況を検討したことになる。そして図書館は集団的な知的遺産の具体化と考えられるが、ワールド・ワイド・ウェブが21世紀の新しい図書館と主張しており、図書館の定義と社会的役割は精査されていると論じている。

マックはワールド・ワイド・ウェブが新しい図書館と把握されたりしていると記しているが、確かに情報技術の進展によって、場としての図書館、スペースとしての図書館への関心は、肯定的であれ否定的であれ高まっている。例えば、ユルゲン・ハーバーマスの公共圏の概念を現代の公立図書館に適用する考えがある。ハーバーマスの公共圏に図書館を位置づけるとともに、新自由主義を批判したのがジョン・ブッシュマンの業績『民主的な公共圏としての図書館』⁶⁴⁾である。さらにフランク・ウェブスターも同じように考えている。⁶⁵⁾

また図書館、とりわけ公立図書館という場をどのように考察するかについて、示唆を与える重要でポピュラーな研究書が出現してきた。例えば、ロバート・パットナムの『孤独なボウリング』⁶⁶⁾は、パットナム自身が定義する「社会関係資本」(social capital)が20世紀の前半期から1960年頃にかけて増大し、その後、急速に減退していくことを示し(例えば、市民組織や専門職組織への参加人数の変遷などで証明する)、そうした社会関係資本の再生、コミュニティの再生を訴えている。なお社会関係資本とは、「人びとの結びつきを作り、信頼と理解の紐帯を確立し、コミュニティを構築する」⁶⁷⁾ものをいう。また2003年に刊行されたパットナムとルイス・フェルドスタインの共著『いっしょによりよく』では、特に第2章をシカゴ公立図書館のニアノース(Near North)分館の活動にあて、社会関係資本を構築し、持続するについての公立図書館の重要性を論じた。⁶⁸⁾

さらにレイ・オールデンバーグは『偉大な良き場』⁶⁹⁾で、第3の場(third place)という概念を提出している。これは公的な場でもなく、私的な場でもない中間的な場で、家庭や職場にいない時に、その人を見つけ出せる場所として機能している。具体的にはカフェ、パブ、コーヒーショップ、書店、バー、美容院など、多くの場をいう。オールデンバーグはこうした第3の場がコミュニティの構築にとって非常に重要であると強調し、そうした場を概念化した。オールデンバーグは、新奇性、展望、精神的強壯剤、友情といった個人的利益という観点から、さらに政

治的役割、人を結びつける習慣、善を促進し統制する機関としての役割、リクリエーションの精神、良識ある人の利用と楽しみのための公共的領域の保障の重要性といった社会的効用の観点からも、第3の場を重視している。2002年にオールデンバーグが編纂した『第3の場を祝福する』⁷⁰⁾は、全国から第3の場として19の例を挙げている。例えばコーヒーショップ、書店、体育館、都会の街並みの景観などであるが、図書館自体は除外されている。

こうしたハーバーマス、パットナム、オールデンバーグの著作は、図書館という場の歴史と現状を把握するに際して、豊かな洞察を与える。例えばジョン・ブッシュマンとグロリア・レッキーが編纂した『場としての図書館』には、オールデンバーグの枠組みを適用した論文がいくつかある。⁷¹⁾また第3の場という枠組みを用いた雑誌論文もある。⁷²⁾なおオールデンバーグが図書館という場を第3の場として取り上げていない理由は明確で、第3の場であるための条件のうち、最も重要な「会話を主要な活動にする」に合致しないからである。オールデンバーグは図書館自体を取り上げていないものの、『偉大な良き場』には第3の場を代表する場を写真として示し、そこではお話し会やグループ活動を示す写真を組み込んでいる。そしてお話し会やグループ活動といえ、歴史的に公立図書館が展開してきた活動でもある。その点で、オールデンバーグは図書館への認識が高いとは思われないが、そこには公立図書館の当然とされてきた原則が介在している。すなわち、公立図書館は個人の読書、それも黙読の場であり、会話は原則として禁じられてきたという事実である。たしかに古典的な公立図書館の主たる目的からすると図書館は第3の場になりえないかもしれないが、公立図書館が現実に第3の場を抱えてきたのも事実であろう。

女性クラブやソーシャル・ライブラリー、さらには初期公立図書館の新聞閲覧室や集会室、さらに児童室にみられる第3の場としての役割、さらに今後の公立図書館が果たすべき第3の場の役割を研究するのは、豊かな成果を生むであろう。それはまた、ヴァンスリックの業績『すべての人に無料の図書館』が女性図書館員の専門職としての「生活」の中で果たした図書館の実態を豊かに解明したように、住民の生活の中で果たしてきた図書館の実態、住民の生活の中で果たすべき図書館のあり方を解明する

May 2009

ことになる。

注

- 1) Wayne A. Wiegand, "Out of Sight, Out of Mind: Why Don't We Have Any Schools of Library and Reading Studies," *Journal of Education for Library and Information Science*, 38(4), 1997, p.314-326; Wayne A. Wiegand, "Introduction: Theoretical Foundations for Analyzing Print Culture as Agency and Practice in a Diverse Modern America," in James P. Danky and Wayne A. Wiegand, eds., *Print Culture in a Diverse America*, Urbana, University of Illinois Press, 1998, p.1-13; Wayne A. Wiegand, "Tunnel Vision and Blind Spots: What the Past Tells Us about the Present: Reflections on the Twentieth-Century History of American Librarianship," *Library Quarterly*, 69(1), 1999, p.1-32 [「20世紀の図書館・図書館学を振り返る：狭い視野と盲点」川崎良孝訳, 川崎良孝編著『図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ』京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2001, p.3-44].
 - 2) Abigail Van Slyck, *Free to All: Carnegie Libraries and American Culture, 1890-1920*, Chicago, University of Chicago Press, 1995 [「すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』川崎良孝・吉田右子・佐橋恭子訳, 京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2005].
 - 3) 本稿に関係するヴァンスリックの業績は以下である。
 - Abigail Van Slyck, "The Utmost Amount of Effectiv [sic] Accommodation?: Andrew Carnegie and the Reform of the American Library," *Journal of the Society of Architectural Historians*, 50, 1991, p.359-383.
 - Abigail Van Slyck, *Free to All*, 1995, *op.cit.* [「すべての人に無料の図書館』*op. cit.*, 2005].
 - Abigail Van Slyck, "The Lady and the Library Loafer: Gender and Public Space in Victorian America," *Winterthur Portfolio*, 31(4), 1996, p.221-242.
 - Abigail Van Slyck, "The Librarian and the Library: Why Place Matters," *Libraries & Culture*, 36(4), 2001, p.518-523.
 - Abigail Van Slyck, "Housing the Happy Camper: Tents and Cabins at Minnesota's Summer Camps," *Minnesota History*, 58, Summer 2002, p.68-83.
 - Abigail Van Slyck, "Kitchen Technologies and Meal-time Rituals: Interpreting the Food Axis at American Summer Camps, 1890-1950," *Technology and Culture*, 43, 2002, p.668-692.
 - Abigail Van Slyck, "On the Inside: Preserving Women's History in American Libraries," *Restoring Women's*
- 吉田・川崎：アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究
- History Through Historic Preservation, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 2003, p.145-160.
 - Abigail Van Slyck, *A Manufactured Wilderness: Summer Camps and the Shaping of American Youth, 1890-1960*, Minneapolis., University of Minnesota Press, 2006.
 - Abigail Van Slyck, "Managing Pleasure: Library Architecture and the Erotics of Reading," in John E. Bushman and Gloria J. Leckie, *The Library as Place: History, Community, and Culture*, Westport, Connecticut, Libraries Unlimited, 2006, p.221-234 [「楽しみの管理：図書館建築と読書のエロティクス」『場としての図書館：歴史, コミュニティ, 文化』川崎良孝・久野和子・村上加代子訳, 京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2008, p.325-343].
 - 4) Abigail Van Slyck, "Housing the Happy Camper: Tents and Cabins at Minnesota's Summer Camps," *op.cit.* 3)
 - 5) Abigail Van Slyck, "Kitchen Technologies and Meal-time Rituals: Interpreting the Food Axis at American Summer Camps, 1890-1950," *op.cit.* 3)
 - 6) Abigail Van Slyck, *A Manufactured Wilderness: Summer Camps and the Shaping of American Youth, 1890-1960*, *op.cit.* 3), p. xxiv-xxivi.
 - 7) *ibid.*, p. xxxi.
 - 8) *ibid.*
 - 9) *ibid.*, p. xxxiii-xxxiv.
 - 10) Donald E. Oehlerts, *Books and Blueprints: Building America's Public Libraries*, Westport, Conn., Greenwood Press, 1991.
 - 11) Kenneth Alan Breisch, "Small Public Libraries in America 1850-1890: The Invention and Evolution of a Building Type (volume 1 and 2)," Ph.D. dissertation (History of Art), University of Michigan, 1982.
 - 12) Kenneth Alan Breisch, *Henry Hobson Richardson and the Small Public Library in America: A Study in Typology*, Cambridge, Mass., The MIT Press, 1997.
 - 13) James F. O'Gorman, *H.H. Richardson: Architectural Forms for an American Society*, Chicago, The University of Chicago Press, 1987.
 - 14) Virginia E. McCormick, *Educational Architecture in Ohio: From One-Room Schools and Carnegie Libraries to Community Education Village*, Kent, Ohio, The Kent State University Press, 2001.
 - 15) *ibid.*, p.185-219.
 - 16) David I. Macleod, *Carnegie Libraries in Wisconsin*, Madison, Wisconsin, State Historical Society of Wisconsin, 1968.
 - 17) George Bobinski, "Andrew Carnegie's Role in American Public Library Development," Ph.D. dissertation, Univ. of Michigan, 1966.

図書館界

- 18) George Bobinski, *Carnegie Libraries: Their History and Impact on American Public Library Development*, Chicago, American Library Association, 1969.
- 19) Alvin Johnson, *A Report to Carnegie Corporation of New York on the Policy of Donations to Free Public Libraries*, New York, Carnegie Corporation, 1915(ただしこの文書が私的に配布されたのは1919年である).
- 20) Robert Sidney Martin, *Carnegie Denied: Communities Rejecting Library Construction Grants, 1898-1925*, Westport, Conn., Greenwood Press, 1993.
- 21) Carolyn Hall Leatherman, "Richmond Rejects a Library: The Carnegie Public Library Movement in Richmond, Virginia, in the Early Twentieth Century," Ph.D. dissertation, Virginia Commonwealth University, 1992.
- 22) *ibid.*, p.35.
- 23) Theodore Jones, *Carnegie Libraries Across America: A Public Legacy*, New York, John Wiley & Sons, 1997.
- 24) Daniel F. Ring, "Carnegie Libraries as Symbols for an Age: Montana as a Test Case," *Libraries and Culture*, 27 (1), 1992, p.1-19; Nancy Becker Johnson "A Chronicle of Men, at Least Two Women, and Money: Sarah C. N. Bogle and the Carnegie Corporation of New York," *Libraries and Culture*, 31(2), 1996, p.422-446; Peggy Sullivan, "Carnegie Fellowships for Librarians 1929-942: A Microcosm of Carnegie Corporation and American Library Association Joint Enterprise," *Libraries and Culture*, 31(2), 1996, p.437-446.
- 25) Abigail Van Slyck, "On the Inside: Preserving Women's History in American Libraries," *op.cit.* 3), p.145.
- 26) *ibid.*, p.147.
- 27) *ibid.*
- 28) *ibid.*, p.149-150.
- 29) *ibid.*, p.155-156
- 30) ヴァンスリック『すべての人に無料の図書館』*op.cit.* 2), p.164.
- 31) Abigail Van Slyck, "On the Inside: Preserving Women's History in American Libraries," *op.cit.*, p.157.
- 32) ヴァンスリック『すべての人に無料の図書館』*op.cit.* 2), p.165.
- 33) Abigail Van Slyck, "The Lady and the Library Loafer: Gender and Public Space in Victorian America," *op.cit.* 3) 41) *ibid.*, p.221.
- 34) *ibid.*, p.223.
- 35) *ibid.*
- 36) *ibid.*, p.223-224.
- 37) *ibid.*, p.225.
- 38) *ibid.*, p.225-226.
- 39) *ibid.*, p.227.
- 40) *ibid.*, p.228.
- 41) *ibid.*, p.230-231.
- 42) *ibid.*, p.229.
- 43) *ibid.*, p.234-235.
- 44) *ibid.*, p.236-237.
- 45) *ibid.*, p.239.
- 46) *ibid.*
- 47) *ibid.*, p.240.
- 48) *ibid.*, p.241.
- 49) Evelyn Kerslake and Nickianne Moody, eds. *Gendering Library History*, Liverpool, John Moores University, Association for Research in Popular Fictions, 2000; Betsy Kruger and Catherine A. Larson, eds. *On Account of Sex: An Annotated Bibliography on the Status of Women in Librarianship, 1993-1997*, American Library Association, Lanham, Md, Scarecrow Press, 2000.
- 50) ヴァンスリック『すべての人に無料の図書館』*op.cit.* 2), p.164-167.
- 51) *ibid.*, p.142.
- 52) *ibid.*, p.262-263.
- 53) *ibid.*, p.57-58.
- 54) *ibid.*, p.84.
- 55) *ibid.*, p.70.
- 56) *ibid.*, p.116-117.
- 57) ヴァンスリック「楽しみの管理：図書館建築と読書のエロティクス」*op.cit.* 3)
- 58) *ibid.*, p.336.
- 59) *ibid.*, p.341.
- 60) *ibid.*, p.342.
- 61) Adam Arenson, "Libraries in Public before the Age of Public Libraries: Interpretating the Furnishings and Design of Athenaeums and Other "Social Libraries," 1800-1860," in John E. Bushman and Gloria J. Leckie, *The Library as Place: History, Community, and Culture*, *op.cit.* 3), p.41-60 [「公立図書館の時代に先立つ公共の図書館：アセニウムをはじめとする『ソーシャル・ライブラリー』の備品とデザインの解釈：1800-1860年』『場としての図書館：歴史，コミュニティ，文化』*op.cit.* 3), p.59-89].
- 62) Bonnie Mak, "On the myths of Libraries," in John E. Bushman and Gloria J. Leckie, *The Library as Place: History, Community, and Culture*, *op.cit.* 3), p.209-220 [「図書館の神話』『場としての図書館：歴史，コミュニティ，文化』*op.cit.* 3), p.309-324].
- 63) John E. Buschman, *Dismantling the Public Sphere: Situating and Sustaining Librarianship in the Age of the New Public Philosophy*, Westport, Connecticut, Libraries Unlimited, 2003 [「民主的な公共圏としての図書館：新公共哲学の時代に司書職を位置づけ持続させる』川崎良孝訳，京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2007].

May 2009

特別研究例会(第262回研究例会) 案内

- 65) Frank Webster, *Theories of the Information Society*, London and New York, Routledge, 1995 [『情報社会』を読む』田畑暁生訳, 青土社, 2001, p.174-181].
- 66) Robert D. Putnam, *Bowling Alone: Collapse and Revival of American Community*. New York, Simon & Schuster, 2000 [『孤独なボウリング: 米国コミュニティの崩壊と再生』柴内康文訳, 柏書房, 2006].
- 67) Robert D. Putnam and Lewis M. Feldstein, *Better Together: Restoring the American Community*. New York, Simon & Schuster, 2003, p.1.
- 68) *ibid.*, p.34-54.
- 69) Ray Oldenburg, *The Great Good Place*, New York, Marlowe & Company, 1999.
- 70) Ray Oldenburg, *Celebrating the Third Place: Inspiring Stories about the "Great Good Places" at the Heart of Our Communities*, New York, Marlowe, 2002.
- 71) 『場としての図書館: 歴史, コミュニティ, 文化』*op.cit.* 3)
- 72) Gloria J. Leckie and Jeffrey Hopkins, "The Public Place of Central Libraries: Findings from Toronto and Vancouver," *Library Quarterly*, 72(3), 2002, p.326-372.

◆特別研究例会(第262回研究例会) 案内◆

—図書館法の60年と現在

日本図書館研究会では例年、評議員会の開催にあわせて特別研究例会を開催してきました。今年度は、間もなく60年を迎える図書館法について、戦後図書館運動の展開とともに振り返るお話を、塩見昇日協理事長にお願いしました。

本例会は、会員はもとより、広く公開しています(参加は無料です)。事前申込等も特に必要ありません。ふるってご参加ください。

日時：2009年5月31日(日) 10:30~12:10

会場：京大会館

(〒606-8305

京都市左京区吉田河原町15-9)

TEL075-751-8311

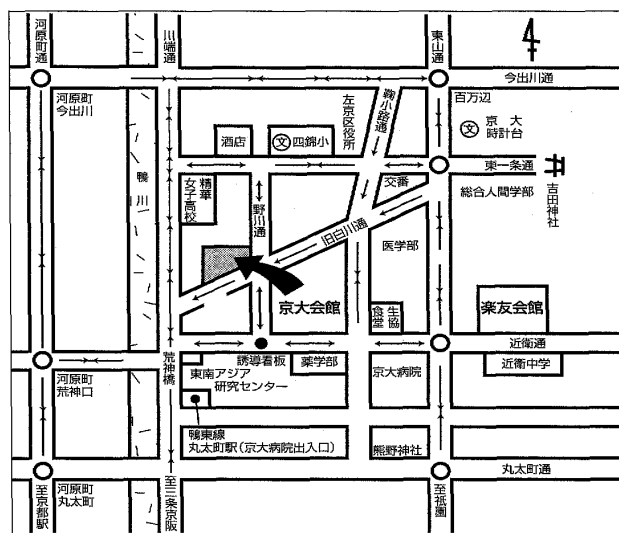
テーマ：「図書館法の60年と現在

—私的なかかわり、回想を軸に—

発表者：塩見 昇氏(日本図書館協会理事長)

要旨：2006年12月の教育基本法「改正」から08年6月の図書館法改正に至る経緯と、その「成果」を活かす取り組み課題については、この一年余、幾度か書いたりお話ししてきた。今回は少し視点を変えて、私自身の図書館法との出会いやかかわり、図書館法への思いを軸に、戦後図書館運動の展開に図書館法の60年を重ねて振り返ることで、図書館法が果たしてきた意義と役割をたしかめたい。あわせて、法の現在とこれらについてもいっぺんお話できれば、と思う。

〈京大会館案内図〉



- 京都駅より市バスD2のりば(206)「京大正門前」下車
- 三条京阪より京都バス17番のりば(出町柳経由系統)「荒神橋」下車
- 京阪電車鴨東線「丸太町」駅下車徒歩7分